

□ 評 論

大 坪 盛

「世界における我が国オーケストラのポジション」という興味深いシンポジウムが開催された。主催は文化庁と日本オーケストラ連盟。フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ、日本の5ヶ国の音楽評論家が、日本のオーケストラ4団体（読売日本交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、NHK交響楽団、東京都交響楽団）の定期演奏会を聴き、コメントするという企画だが、注目すべきは、4人の外国人評論家の齒に衣を着せぬ論評である。コメントは幅広い論点から行なわれたが、共通して招かれた外国人評論家が述べたのが、一部のオーケストラを除き「オーケストラ・メンバーの活気と個性の欠如」である。団員同士のコンタクトや相互の意見交換が見られず、結果的に「団員が受動的で指揮者にひたすら付き従う」印象を受けたとのことで、なかなか手厳しい。4人の外国人評論家はいずれも新聞や雑誌に定期的な批評の場を持つ立場からの論評だが、翻って日本の音楽関係紙誌の批評にこのような指摘があまり見られないことに、彼我の差を感じる。シンポジウムに参加した日本人評論家の発言に「大人しい」「活気ななさ」という欠点と思える側面を「日本的な優しさや繊細さの表れ」と肯定的な評価として捉えなおしていたことが興味深い。つまり、音楽の感受性には少なからず国民性が存在し、「音楽には国境がなくても、表現力、聴取力には国境がある」ということにならうか。とはいえ、クラシック音楽がもともと西欧発生の芸術だけに、日本人演奏家、あるいは邦人オーケストラとして、何かが不足することも又事実であろう。日常的に日本人演奏家のパフォーマンスに接している邦人評論家は、的確な論評を加えているのか再考の余地がある。

音楽評論というジャンルは勿論、文学を除く幅広い芸術ジャンルに門戸を開き、優れた芸術評論を著した人に贈られる「吉田秀和賞」の第24回は、通崎睦美著「木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」」に贈られた。通崎はマリimba奏者として活発な活動を展開しているが、ある時、往年の名木琴奏者・平岡養一が初演した紙軸輔作曲「木琴協奏曲」を演奏したことがきっかけで、平岡の愛器と約600点にのぼる楽譜やマレットを譲り受け、それ以後、演奏・執筆活動を通じて木琴の復権に力を注いでいる。受賞作の「木琴デイズ」は、平岡養一の評伝であると共に、通崎自身の経験からくり出される専門的な見解を適格な論述で綴った見事な評伝といえる。選者の杉本秀太郎は「これはすぐれた『伝』である。人として何ひとつ欠けるところのない姿で、1907年生まれの平岡養一というひとりの音楽家が一から始めた生涯を1967年生れの通崎睦美が向こう岸までわたりおえた」と称賛。もう一人の選者・片山杜秀も「立派な評伝だ。日本近代音楽史を語るうえで避けて通れぬ一冊である。」と選評を記している。尚、同書は第36回サントリー学芸賞、朝日新聞社第6回関西スクエア賞も同時受賞している。

2013年はヴェルディ、ワーグナーの2大オペラ作曲家の生誕150年記念年にあたっていたため、2人に関する書籍が多く出版されたが、その余波が2014年初頭にまで及び、マルティン・ゲック著「ワーグナー」(上・下、岩井智子他訳)、井形ちずる訳「ヴァーグナー オペラ・楽劇全作品対訳集」という2つの大作が上梓された。2014年はドイツのリヒャルト・シュトラウス(1864~1949)と、日本の伊福部昭(1914~2006)の、前者

は生誕150年、後者は生誕100年の記念の年を迎えた。2人に関する著作も前年ほどではないにしろ何冊か出版されている。

その中から伊福部昭の音楽人生を記した木部与巴仁「伊福部昭の音楽史」、考え抜かれた作品論がユニークな岡田暁生「リヒャルト・シュトラウス」の2作の優れた労作を挙げておく。

以下順不同に昨年上梓された注目すべき著作を上げておきたい。横原千史「ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全作品解説」は、ソナタを通してベートーヴェンの生涯も辿れる好著、皆川達夫「洋楽渡米考 再論」は日本人と西洋音楽の出会いを評述、日本の吹奏楽の受容と発展を明治期から辿る戸ノ下達也「日本の吹奏楽史」、オペラ・ファン、オペラ歌手、演出家も必読の著、岸純信「オペラは手ごわい」、鍵盤楽器の歴史を代表的なピアノ曲と交差させた好著、真嶋雄大「グレン・グールドと32人のピアニスト」、オッフェンバック本邦初の評伝というべき森佳子「オッフェンバックと大衆芸術」。中野雄「小澤征爾 覇者の法則」も小澤の真の姿を活写、更に今年没後100年のスクリーバーの基本本とも言える訳著レオニード・サバネーエフ「スクリーバー」(森松皓子訳)、などを記しておく。加えてここに上げておきたいのは後藤暢子「山田耕作」である。作品論も含めて山田耕作の実像を生き生きと浮かび上がらせている。もう一つ、2年前に亡くなった吉田秀和が長年にわたりNHKFMで遣っていたものをまとめた「名曲のたのしみ」のテーマ別刊行がスタートした。現在4巻目まで出版されている。

日本における音楽評論の歴史は、同じ日本の西洋音楽史の中では、作曲や演奏よりも新しい。文学者の音楽的著述は島崎藤村、上田敏、宮澤賢治や永井荷風、そして石川啄木など枚挙に暇がない。つまり初期は専門の音楽評論家がいちわけではなく、文学者の見聞記やエッセイがその役目を果たしていた。プロフェッショナルな音楽評論家としては大田黒元雄、堀内敬三らの登場がその嚆矢であろう。その後野村光一、山根銀二、園部三郎の世代、そして吉田秀和、遠山一行の世代が続いていく。だが、2年前に吉田秀和、そして2014年12月に遠山一行がこの世を去ったことで一つの時代が終わった感じが強い。遠山一行は吉田秀和とともに、日本の音楽批評界を牽引してきた存在である。遠山は「批評は文学であり、作品である」という路を生涯歩んだ。吉田秀和が「知」の評論家とすれば、遠山は「情」であり、「意」の評論家といえようか。遠山はある文章の中で「一人の聴衆として、率直に自分の経験を書きたいという気持ちが強い。」と書く。つまり「現在の音楽批評の主流と思われる、解説や報道ではなく「自立した文学としての批評作品を書くことである。」と書く。「吉田とともに」と前述したのは吉田も又「自立した文学としての批評作品」を目指していたからである。この路線を歩む後継者は誰なのだろうか。

2014年の音楽界の話題で「負」の最大事件は、佐村河内守の代作問題であった。発端は週刊文春に掲載された代作者、新垣隆の告白記事によるものだが、実はその前年の「新潮45」掲載の野口剛夫「全響の天才作曲家、佐村河内守は本物か」がこの事件に最初に疑問符を投げかけた。偽作発覚以来、週刊誌、放送など一般メディアで大々的に取り上げられ、前述の野口剛夫は「編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞」を受賞した。音楽専門紙誌は論評に値しないと考えたのか殆んどこの件に関して沈黙を守ったが、果たしてこの問題はもう終止符を打たれたのだろうか?例年この欄で報告している音楽評論家の登龍門である「柴田南雄音楽評論賞」は、今年度から主催団体をアリオン財団から桐朋音楽大学に移して開催されたが、受賞者は出なかった。又、イギリス音楽などに造詣が深かった音楽評論家の吉村溪氏、享年50歳。モーツァルト研究家で音楽評論でも活躍した高橋英郎氏の各氏が死去した。